

釧路校では教職実践演習への取り組みとして、中心的な役割を果たすものとして教育フィールド研究という実習科目を位置づけています。その授業の平成十八年度からその四年半に渡る経過を中心に報告します。

まず、その前提として、今教師力として何が求められているかについて考えると、教科指導力よりも学級経営力や生徒指導力が強く求められています。その実践力をつけるためには、どうしても大学は力不足です。大学は理論面に優れていますが、ある程度の実践の経験がないと、その理論が上滑りしてしまう危険性があります。そこで、釧路校では、一年生の前期より毎週金曜日に1日小学校に赴くことによって、現場経験を身につけさせることとしました。それが教育フィールド研究です。

教育フィールド研究は実習委員会が所管し、二年生の基礎実習や三年生の教育実習などと連携して行っています。特に、学校現場と大学の委員会のパイプ役としての義務教育の退職教員であるスーパーバイザーの方々は、とても頑張っています。やはり、大学では教育現場に対して力不足な面は否めません。

教育フィールド研究は一年生と二年生の二年間、金曜日に釧路市内及び近辺の小学校に赴きます。9時30分から15時30分までの1日6時間前後、半期で10回前後小学校に行きます。四期合計で240時間程度を小学校で経験することになります。教育実習が週5日で5週間の計200時間くらいですから、それと匹敵する時間をすでに小学校で経験していることとなります。それも実習前に。

小学校にそれだけ長い時間いるわけですから、当然問題が起きます。懇切丁寧に事前指導しても、大学生にもなりきっていない一年生や二年生なのですから、受け入れ校とのトラブルは開始当初頻繁に起きていましたし、今でも全く無くなっているわけではありません。その時、現場と大学を取り持つ役割をしているのがスーパーバイザーの方々です。実践的な授業や事前・事後指導などで大学としては、即戦力のスーパールーキーのような存在で大変重宝させてもらっています。

教育フィールド研究の具体的な内容は、必ずしも教科指導ばかりではありません。一年生では環境整備的な活動も多いのですが、学級に入って子ども理解や運動会の手伝いや一年間の学校行事のあらましなどの学校運営を一年間のサイクルで理解するのに役立っています。二年生の基礎実習も1週間ではありますが、教育フィールド研究を行っている小学校と同じ学校で行うようにしています。参加型の観察実習や授業作りワークショップなどを行っています。基礎実習も、3年目の実習を見据えた形で、一・二年生の教育フィールド研究を踏まえた形で行っています。三年生前期で行う教育フィールド研究Ⅲは、実習校での教育実習と連動する形で行っており、事前指導としての役割も持っています。

次に、教育フィールド研究でのチェックリストの意義を考えます。4年前に釧路校で作成した教育フィールド研究用のチェックリストでは、うまく活用できませんでした。そこで、大チェックリストに独自項目を加えることとしました。二年生では用意された項目と独自項目の割合は半々ぐらいというのが普通だと思います。一年生では今回全学で作成された大学のチェックリストの項目がほとんどで、独自項目はまったくありません。

教育フィールド研究のチェックリストの実施した四年間の経験から解っていることは、

① 入力学生が手軽に出来るように携帯電話からがベストである。

② どのように多くの項目を設定しても、又予想される項目を網羅したとしても、やがて行き詰まってしまうし、その方法が良いとも思われない。一定の指針としてのチェックリストは必要だが、それを固定的に使うよりも学生が、具体的な項目を自らの言葉で記入する方法の方が実践的である。

なせなら、学生も実習校も千差万別なのですから。

最後にこれからの課題について述べます。教育現場での実戦経験については、かなりの効果を挙げているのですが、その経験と大学での座学の授業との往還が、以前から問題にされながら進んでいません。今後の課題となっています。

# 教職実践演習に向けた釧路校の取り組み

教育実践力を養成するための取り組み  
--教育フィールド研究・チェックリスト・振り返り--

教職実践演習統括コーディネーター  
釧路校教授(図書館分館長) 石井 由紀夫

## ●現代の教師に求められる多様な力量と教員養成の課題（教育新聞第2979号 平成22年9月23日）

- 現代の教師に求められている力は、以下のようなものすべてである。
- 総じて言えば、「学級経営力」、「生徒指導力・生活指導力」、「教育相談力」、教科のおもしろさを伝え、教科の内容を深めていく「学習指導力」、多様な子どもの状況に応じて対応できる「臨床的実践力」、友や同僚と人間関係を作り共に進めていく「協働遂行力」、父母・地域と取り結ぶ「地域教育連携力」、子どもの学校環境の雰囲気を作る「環境整備力」など、あらゆる実践的な力が求められている。



## ●理論と実践のスパイラル

- 理論は、実践を普遍化したものであるが、ある程度の実践の経験がないと、理論を聞いても、その具体的な内容がイメージできない。ある程度経験と経験、経験と一般論を結びつけていくと、普遍的なものが認識されていく。
- 理論と実践は、1年生から4年生に向けて、学年の成長に応じて変化していくもので、理論→実践→理論→実践→理論のスパイラルが永久に繰り返される。
- =釧路校は、1年次から1週間に1度学校に赴く。早い段階から実践を踏まえて大学の理論的な講義を学習する。



## ● 釧路校の組織体制

- 教育実習委員会が一括して、教育実践を担当。実践間の連携を取りやすい。
- 教育フィールド研究・基礎実習・教育実習・教育実習Ⅱ・へき地教育実習・特別支援教育実習等をトータルに管轄
- 学校現場と大学とのパイプ役は、スーパーバイザーが担当



## ●教育フィールド研究の単位

- 教育実習は、5週間5単位で、それに準じた単分量を採用
- 2単位×前後期で通年化したのは、9月の夏休み等を含めて、年間を通じた子どもの成長と学校の運営をとらえるため。



## ●1週間に1日の教育フィールド研究の意義と学年別発展の考え方

- 実践を継続的に行いながら、それをゆっくり振り返る時が必要
- 1・2年生の間は、1週間に1日ほど学校に赴き、6日間をその振り返りとして位置づける。
- すぐに3年生の教壇実習に入るのではなく、段階的な経験内容の構築が必要



## ●学校現場との調整役は、 スーパーバイザー

- 教育フィールド研究の細部の指導方法や学校運営体制などは、細かい学校ごとの調整が必要なので、個々の学校の内情にくわしいスーパーバイザーによる調整が不可欠。
- 大学の教員がどんなに学校を訪問しても、できない微妙な調整部分がある。
- →スーパーバイザーは、教育学部にとって不可欠な存在



## ●学年別教育フィールド研究・ 教育実習の体系

- 1年次前期=学級環境整備・教材花壇・学校行事・遊びづくり・子ども理解
- 1年次後期=遊びづくり・子ども理解・授業参観・学級運営比較
- 2年次前期=学級活動・学級運営他全般・授業観察
- 2年次後期=基礎実習・復元指導案作成・授業展開
- 3年次前期=教育実習前の学校理解としての教育フィールド研究Ⅲ
- 3年次後期=教育実習を踏まえた教育フィールド研究Ⅲ・課題研究実習
- 4年次前期=副免中学校実習・特別支援教育実習の開始
- 4年次後期=採用直前実習



## ●基礎実習と教育フィールド研究の一体化

- 教育フィールド研究の学校で基礎実習を行う。子どもの特性・学校運営の特性を踏まえながら、授業分析
- 授業観察だけでなく、教育フィールド研究で見ている学校の様子をトータルにとらえながら、学生自身が教師の立場に立った授業づくりのポイントを観察できるように基礎実習の目標を高めていく。→参加型の観察実習（復元指導案等）・授業づくりのワークショップ



## ●1・2年次教育フィールド研究で授業観察のねらいを明確化

- →3年次の実習を見据えて、2年次までに授業の基本的な流れと方法を押さえておく。
- めあての明確化・発問法・指示法・説明法・グループワーク学習・板書法、ワークシート活用法、など



## ●教育フィールド研究Ⅲの内容

- 教育実習校で、教育実習と連動させて実施
- 後期から研究実験・研究開発的な実習



## ● チェックリストの意義

- (1)理論と実践を意識的に媒介する「実践目標（めあて）と反省」
- (2)自ら振り返る自己評価と、友人どうしで比較検討する相互評価
- (3)チェックリストを用いた目標策定・反省・省察の必要性の意義
- チェックリストは大まかな実践をとらえる観点を書いてあるが、その中には様々な実践方法がある。ある程度大きな観点を元にしながら、さらに具体的なものを創出しながら、その実践を振り返っていくことが重要。したがって、同じ項目を見ても、1年時に見る観点・具体的目標と2年次に見る観点・具体的目標は、変化していく。
- (4)チェックリストのとらえ方の発展
- チェックリストを持って、その項目に照らし合わせながら実践を見ていくと、見る観点や方法が深まっていく。すべての項目が、教師の実践的指導力にとって重要であるが、一度に全部をとらえることはできないので、毎回の目標として抽出しながら、自分の実践を改善していく。
- (5)実践の研究開発能力
- 単なる受け身ではなく、自ら教育実践方法を創り出していく研究開発能力を、4年間を通じて高めていくことを目指す。実践の研究開発能力は、単にハウツーを固定的に真似ることではなく、自分の実践や学校教育活動をより良いものに変えていくことができる力である。

## ●毎週教育フィールド研究でのメールの目標と振り返り

- 1日のうちの毎時間を区切って、何を行ったかの日誌を1年次から継続
- メールでの質問および自己評価やつまずきなどへの学生全員の個別アドバイスは、スーパーバイザーが担当している。



## ●月に1回の学校現場での振り返り

- 実習担当教師等によるアドバイス
- 学生どうしの相互アドバイスと相互評価



## ●土曜日を使った振り返り活動

- 毎週土曜日を交代で、振り返り活動に位置づける
- 模擬授業
- 学校間の相互交流



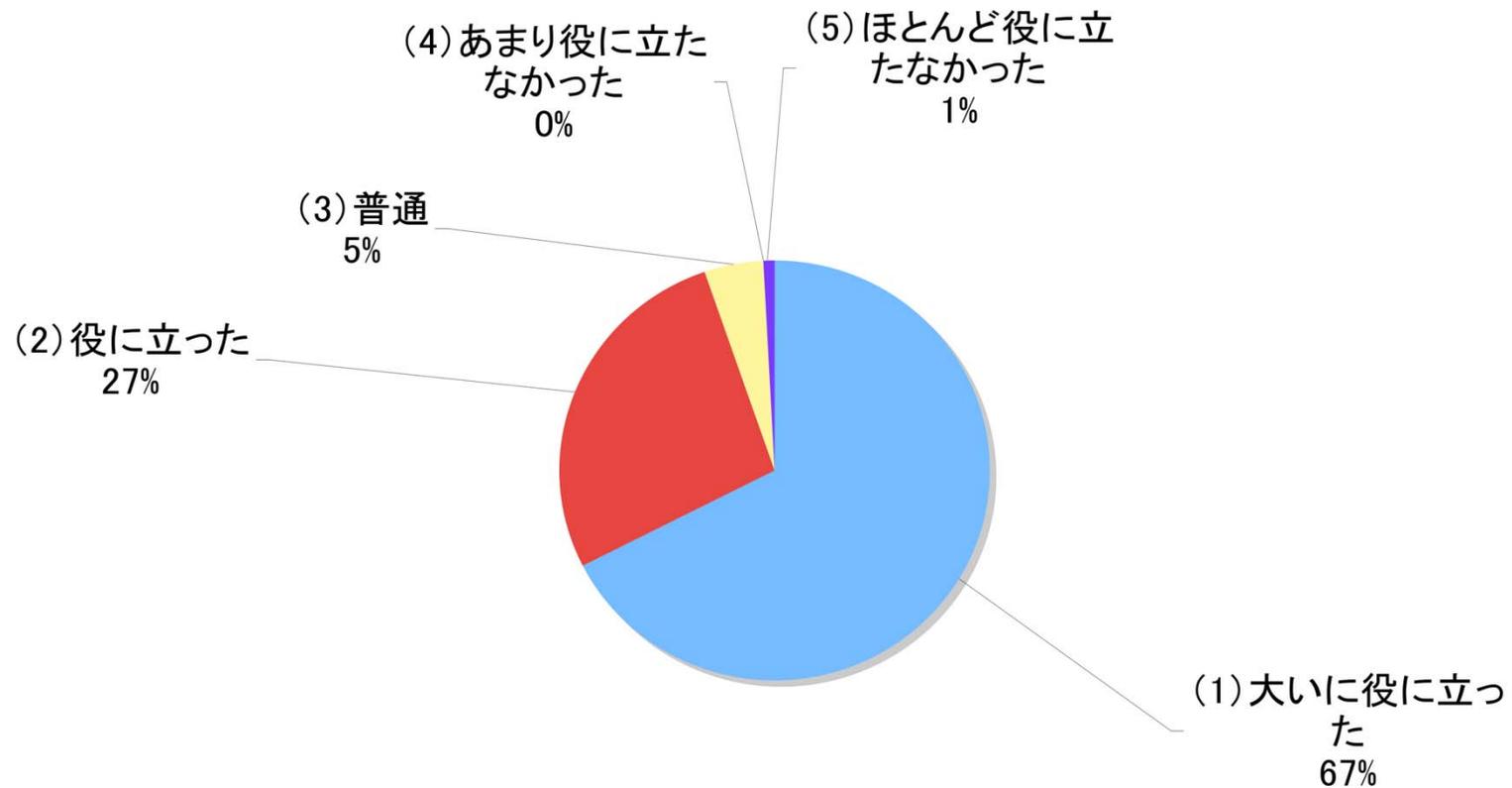
## ●1年次からの教育実践 の体系化の成果

- (1)早い段階から学生の目的意識と教職意識が向上
- (2)教師の資質・能力は、環境と雰囲気・子ども理解・学級経営・生徒指導・学習指導・地域連携などの総合的な取り組みによって成り立つことを認識
- (3)実践と振り返りの積み重ねによって成長していくことを認識
- (4)1年次のメール記録から積み上げてきたポートフォリオが、自身の成長を実感
- (5)教師の適性の自信は、1年次から2年次に落ち込み、3年次に再び向上
- =3年次の自信の向上は、到達度ではなく、継続によって乗り越えられるという自信
- (6)実践の中では成功と失敗が繰り返されるが、失敗を改善に生かすことが重要であるという認識

## ● 学生から見た評価

### ○ 1年生時のアンケート

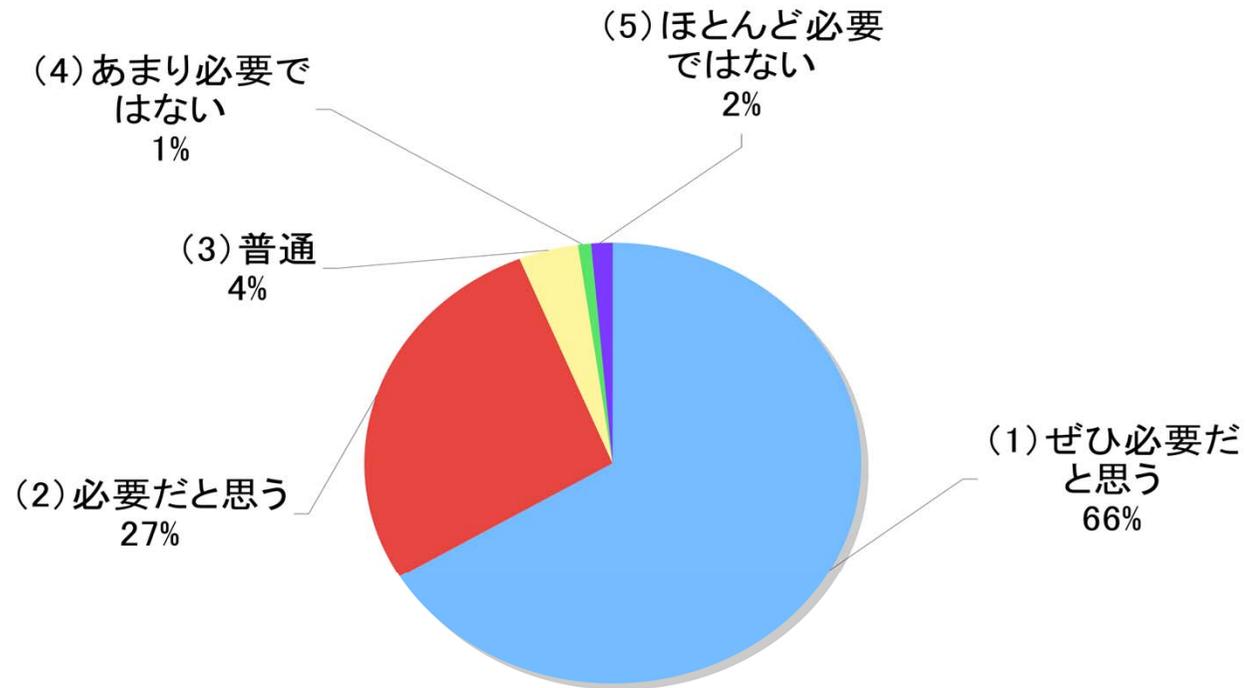
5. 子どもの様子や、子どもとの関わり方を考える上で、教育フィールド研究は役に立ったと思いますか。



## ● 学生から見た評価

### ○ 1年生時のアンケート

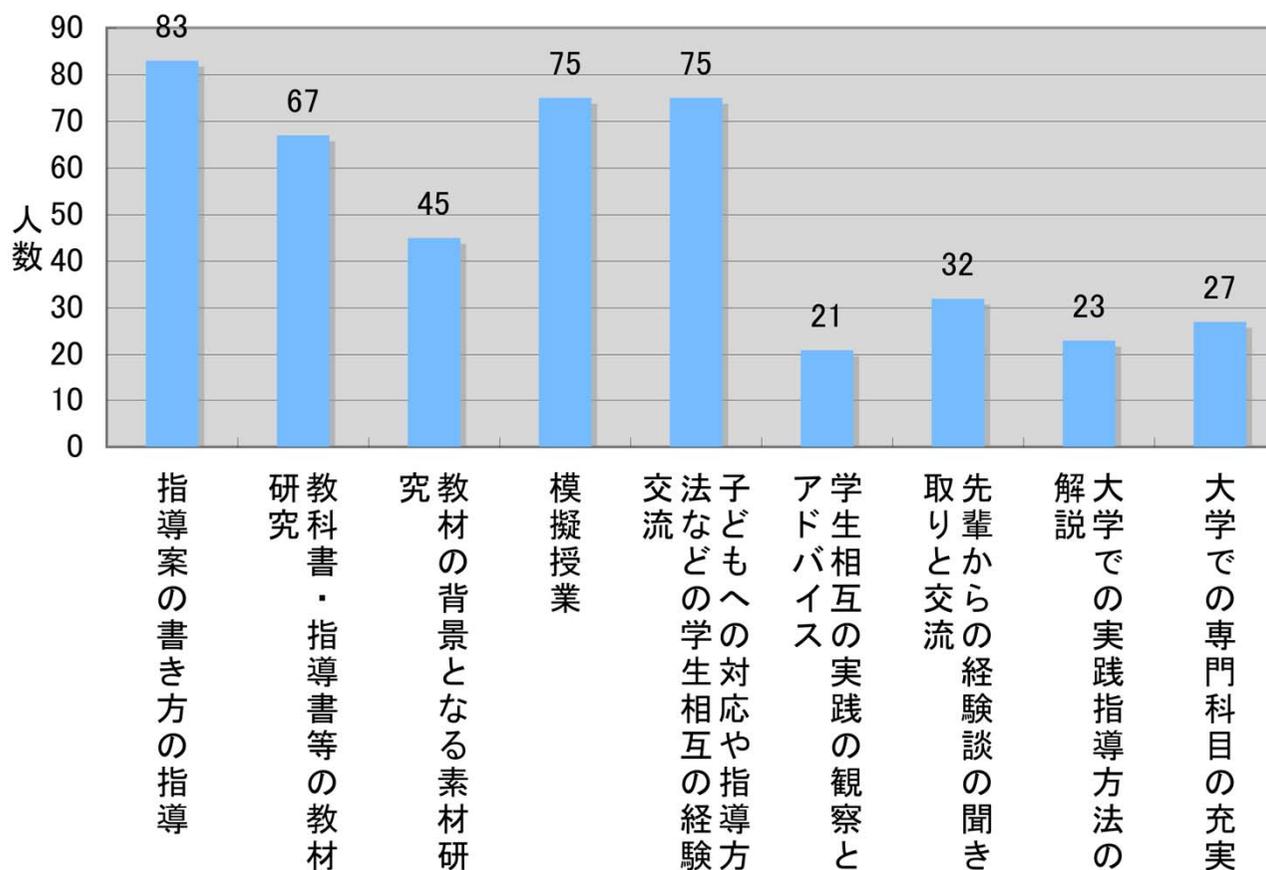
6. 今後教育フィールド研究で学校現場に入ることは必要だと思いますか。



# ● 学生から見た評価

## ○ 1年生時のアンケート

7. 教育フィールド研究での学校現場の体験と併せて、今後どのようなことを勉強したいか、あるいは指導してほしいと考えますか。(複数回答可)



## ●教育実習・実践の体系化の課題

- (1) 教育フィールド研究の振り返りと実践による「理論と実践の往還」の一層の充実
- (2) 教育実習充実は、教員養成と実践的指導力の向上の生命線
- 教育実習に出るハードルおよび教育実習のハードルを高くする→実践力を有した教師が現場に出て行くことを目指す。
- これまでの教育実習の考え方の転換=「大学での理論と基礎知識、学校での実践」の転換
- (3) 1・2年次の教育フィールド研究の集大成としての教育実習として、相互の連関性を高める
- (教師の成長の長期的なライフコースからしても、教育実習も3年間かけて初任者の力量を養成していく)
- (4) 学校現場と大学が直接教育実習生を指導していく体制は不可欠
- (5) スーパーバイザーなどの実践家の役割は、細部の実践指導および学校との調整役として、極めて大きい



## ●教育フィールド研究 チェックリストの課題

- 1. 入力は、携帯メールからできるようにすることが、学生が日常的に活用できる条件となる。
- 2. 学生の目標は、同じ言葉で書かれていても、実践や関心のレベル差によって、無段階的な発展内容を有する→ベテラン教師が書くような抽象的な目標ではなく、学生は具体的な記述式の言葉を自ら記入することが重要になる。そのためチェックリストは、実践と改善の指導参考資料として位置づく。



## 釧路校教職実践演習に向けた計画

### 実施にあたって

チェックリストを活用した一連の自己評価活動を意味あるものにするために、自己評価したものに対して、備考欄に、なぜ、自分はこのように評価したのかという根拠・理由を必ず書くよう指導することにした（前期指導済）。このことによって、4年間の自己の成長と課題を自覚できるようになり、教職実践演習にむけての土台形成が期待される。

次表2枚



## 1年から2年前期教育フィールド研究のチェックリスト利用

- ◎一年前期
- 教育フィールド：ワークシートによるチェック作業
- ・月一回、学校現場での振り返りとレポート作成
- ・月一回、大学での振り返りを行い、異なる学校との意見交換も行う。レポート作成
- ◎一年後期
- 教育フィールド：ワークシートによるチェック作業
- ・月一回、学校現場での振り返りとレポート作成
- ・月一回、大学での振り返りを行い、異なる学校との意見交換も行う。レポート作成
- ◎二年前期
- 教育フィールド：ワークシートによるチェック作業
- ・月一回、学校現場での振り返りとレポート作成
- ・月一回、大学での振り返りを行い、異なる学校との意見交換も行う。レポート作成
- ◎基礎実習：公立小学校で行う。ワークシートによるチェック作業
- ・学期末に全体の振り返りを行う。レポート作成
- ・介護体験：ワークシートによるチェック作業



## 2年後期からの教育フィールド研究のチェックリスト利用

- ◎二年後期
- 教育フィールド：ワークシートによるチェック作業
- ・月一回、学校現場での振り返りとレポート作成
- ・月一回、大学での振り返りを行い、異なる学校との意見交換も行う。レポート作成
- ◎三年前期
- 教育実習（主免）：ワークシートによるチェック作業
- ・チェック作業より細部にわたる総合評価作業を開始する。
- ◎三年後期
- 教育実習（主免）：ワークシートによるチェック作業
- ・事後指導の中で振り返りを行う。
- ・並行して総合評価作業も進める。
- ◎四年前期—後期
- 教育実習（副免）：ワークシートによるチェック作業
- ・事後指導の中で振り返りを行う。



# 「教育の基礎と理念」の自己評価

チェックリスト入力者	104名	入力率 52.53%
履修者数	198名	

## チェックリスト入力者の自己評価分布

自己設定目標大枠	自己設定目標	自己評価		
教育への使命感や責任感、教育的愛情	これまでのさまざまな教育理論や教育実践から学び、自分の実践に生かしていく。 教育の思想と理論に関する基本的な知識	A	21名	20.19%
		B	61名	58.65%
		C	18名	17.31%
		D	4名	3.85%
児童生徒理解	児童生徒の人格形成にかかわる立場にある一人の人間として、その指導者・支援者としての自覚を持つ。	A	36名	34.62%
		B	54名	51.92%
		C	12名	11.54%
		D	2名	1.92%

## ● 実習との往還科目の設定

- 実践(実習)と理論(科目)との間での往還型科目として、初等教科科目などを2-3年生に設定していく。

